

ギミ

作者 荻窪カルビ

設定

未来の科学技術が発達の時代で、未知な変化が見えないところで行なっている。その中にある寄生生物は生成し、種のように人間の脳に入って微量な養分を取って新たな意識が生まれる。寄生生物は人間の言葉がわからないが、脳の中である種の表現ができて、宿主と言語よりも効率がいい交流ができる。一時期、これは『神』が降臨の現象だという噂も流行っていた。そして現象が頻繁すぎて、疑問と不安がどんどん多くなり、ある生物学者がようやくその本体を世に知らせた。

長い観察の中でこの寄生生物は人の脳に傷害を与えることが発見しなかった、理論的に取り出す手術の成功率は55%しかない。

寄生虫は人々に知られている社会で、直接的な災害など一切起こってなくて、ただ人間の方が激しい争論をしている。差別される人はたくさん出た。それに、家族が寄生されたのを発見され、手術に勧められ、あるいは強制され。反抗の人は家から払い出されるようなこともある。

概要

主人公の高校生は漫画を読む時、自分の中の寄生生物を気づいて、とても気が合うやつだった。その漫画の好きなキャラの名前の略称で「ギミ」と名づけた。本音で話し合う仲間が出てから、精神生活が良くなって、客観的に自分を見て、他人との社交も順調になった。まるで自分の全てが理解できる24時間相談できる親友だ。

彼はそんな生活を守ろうと思って、一応これを秘密として生きていく。

その時代では犯罪率が低くて、中学生が家出しても、福祉で普通に暮らすことができる。夜街でぶらぶらしている学生もたまにある。

一人の払い出された女子学生にあって…家族はルームメイトのような存在で、気が合わないなら簡単な理由で払い出せる。現実生活の知り合いの中で、寄生されている人がいないから、他人の中の寄生生物はどんなやつだろうと気になって、ネット上は噂ばかりで信じがたく、この女性と色々話してみた。この女性は素直だが繊細な人で、中の寄生生物はより静かなもので、たまたまムカつく話がやってくる。

「毎日24時間こいつと付き合ってる、まじで気が狂う」

「手術は？」

「いや、取っちゃうと、かわいそうだろう」

「愛してるんだ」

「そうなの」

「そうじゃないか」

「憫むだけだ」

帰る時女子は連絡を残らず、街が大きいから縁があればまた会おうと。

また会うのが一ヶ月後、彼女にあった。しかし、雰囲気はすごく変わった、全然違う性格になった。そして彼とあったことがないと言った。

主人公が呆然

「ギミも僕の意識を食うか」そう質問したが、なぜか彼は怖くない

ギミが表現した。(しないよ)

「ごめん、疑った見たいだけ、別に食われても」信じてるから

ギミが表現した。(お前の恐怖を感じた、薄い一瞬 笑)

「しょうがないな、人間の自己保護の本能は変えないもんだよ」

ギミが表現した。

「しかし、彼女は どうして そうなったの」

ギミが表現した。(彼女同類の存在が感知でない)

「お前は他の同類に 遇ったことがないだろ、感知できるものかどうかもわからないね」

……

そして彼はもう一人の寄生生物の宿主に知り合った。ギミは同類の相手を感知できた……